

第8回高等学校改革プラン検討委員会（第二推進委員会）議事録

- 1 日時 平成17年9月25日（日）午後1時30分～午後4時30分
- 2 場所 長野県佐久勤労者福祉センター 2階 第5会議室
- 3 出席委員

飯島 俊勝委員長	荻原 拓次委員
佐藤元太郎副委員長	宮阪 義彦委員
芹澤 勤委員	中沢 裕委員
小林 将喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	原 貞次郎委員
和泉 碩也委員	

4 開会

（植松主任教育支援主事）

本日はお忙しい中をお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。
それでは委員長、よろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

皆さん、こんにちは。

第8回の、高等学校改革プラン推進委員会をこれから開催させていただきます。前回、委員会からも資料を事務局へお願いしてございます。その資料の説明、また今回は、塩尻志学館の先生に、おいでいただいて説明をいただきたいということもお願いしたわけであります。

そんな関係で、今日は塩尻志学館の説明を次第に入らせてございます。委員会の前半は資料の説明、また多部制・単位制についての質問等で終わるかなと思っておりますけれども、ご理解をお願いしたいと思います。

それでは次第に従って、資料の説明をお願いいたします。

5 資料・他地区推進委員会審議経過説明

高校教育課植松主任教育支援主事から説明 【説明内容省略】

6 議事

（飯島委員長）

ありがとうございました。

前回、市川委員から、この多部制・単位制について松本筑摩や富山の志貴野高校の説明を受けていましたが、もう少しはっきりしたメリット等説明してほしいということで、ご要望で、それに伴って新たな静岡県のひとつの例題をいただき、ご説明いただいたわけがあります。ご質問、ご意見、委員の皆さんからお願いしたいと思います。

(小林委員)

ただいま静岡中央高校の説明、資料説明をいただいたわけですが、2、3 ご質問いたします。

ここ第2通学区でもだいぶ問題になっています通学範囲や、地理的条件であります、この中央高校というのは静岡市なのですか。人口密度は、長野県の状況と同じか違うかということが一点です。

二点目は、平成5年度から多部制・単位制というのを行われていると。当初、大変高倍率で、すごいなと思いました。この高校が、前から高校があって、こういうふうに変ったのかということだと、その以前の状況はどんな状況で、現在の中央高校に転換してきたのかという点を伺いたい。

それから三点目、春季、子ども入学ということですが、これは編入、転入みたいな、生徒もおられるのか、今までうちにいて行かれなくて、外から入ってきたというような、そこら辺の状況も分かれば教えていただきたいなと思います。それから連携とありますが、大学、この高大連携とあります。この辺がもし可能なら、学習意欲をそそるという面では、大変いいのではないかなと思います。

それからE-ラーニング講座という多彩な内容を含めているということで、夢が広がっている面もある、そういうふうに思っておりますが、それは今後のことに議論を待ちたいと思います。

以上、ご質問いたしたいと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

3点、について事務局お願いします。

(植松主任教育支援主事)

静岡中央高校の設置場所でございますが、これは静岡市内、静岡市葵区城北というところでございます、交通でいきますと静岡駅からバスで25分程度のところでございます。

それから沿革でございますが、この学校につきましては平成5年に新たにこの学校を開設したものでございます。その折に、静岡県立静岡城北高校にございました通信制課程は、こちらのほうへ移ったということでございます。

それから転編入でございますが、入学する生徒の半数は中学を卒業してすぐ入学してくるという状況ですが、約半数は他の高校からの編入等も受け入れている状況で、年齢も、かなり幅広い年齢がいるということでございます。

特に後期でございますが、後期24人を募集してございますが、他の高校を途中で退学した生徒等が新たに、ここで募集に応募してくるという状況ということでございます。

(飯島委員長)

ありがとうございました。小林委員よろしいですか。

(小林委員)

はい。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

(中沢委員)

もうひとつ、お聞きしたいのですが。

静岡県では、多部制・単位制高校は県立中央高校以外に幾つあるか分かりましたら教えてください。

(飯島委員長)

事務局、どうぞ。

(植松主任教育支援主事)

今日は詳しい資料が手元にございませんので、次回あらためてご報告させていただきたいと思います。

(飯島委員長)

ということだそうです。

ほかにいかがですか。

(原 委員)

お願いします。

入試の状況が1ページの片側にありまして、募集定員が上段にあるのですが、これは午前部は何名、午後部は何名というふうに分かれてはいないのですか。そしてそれぞれの生徒の状況はどうなのかということを教えてください。

一言申し上げますが、静岡の人口はどのくらいでしょうかね。80万くらいですか。私は分からないのですが、あまり参考にならないのではないかな。立地条件が違いすぎるんじゃないかという感想を持ちました。

(植松主任教育支援主事)

この学校の場合特に、午前に何人、午後に何人、夜間何人というように、はっきりと最初から分けてはないようでございます。おおよその目安は持っているようですが、生徒が希望する時間帯を見ながら定員の範囲で取るということでございますが、お聞きした中では夜間は割と少なめで30人程度、それから午後が割と多いというようなお話をお聞きしてございます。

(飯島委員長)

ありがとうございます。原委員、取りあえずいいでしょうか。

規模とか通学区の問題というよりも、多部制・単位制の内容、よさが、どういうものがあるかというところの説明をいただいたと思います。ちなみに私の個人的な資料の中には、16年度の中学卒業生は、長野県で2万3,000名程度、静岡は4万丁度程度でいうことで、高校の数は長野県90校、一方静岡県は104校あるようであります。

そんなことは別問題として、今の多部制・単位制のよさ、その辺のところを中心に議論していきたいと思います。

よろしいでしょうか。

なければ、本日休日にも拘わらずご足労いただきました塩尻志学館高校の総合学科主任田畑先生のほうから、今の塩尻志学館の現状についてご説明をいただきたいと思います。

その後それについての質疑、議論に入っていきたいと思います。

塩尻志学館高等学校の現状についての説明

塩尻志学館高等学校総合学科主任田畑邦仁教諭から資料に基づき説明【説明内容省略】

(飯島委員長)

田畑先生、ありがとうございました。

それでは今の田畑先生の説明に対して、質問、意見等、どうぞ直接聞いてください。

(和泉委員)

よろしいですか。

今の説明の中で、静岡の場合もそうでしたが、連携するということで、例えば武蔵工大、や長野大学もやっぺらっしゃるようですが、これは学校の自由意思の裁量権の中でこのようなことは進めているのですか。というのは例えば同じ地区に、文科省の流れを持った学校と、労働省の技術関係の設備があって、設備も教員も質がいいのに、なかなか同じ地区でうまく機能していないような気がするんですが、これはこういうことを考えていたら、もう学校が自動的にその生徒あるいはその科目、専門的に、よりしていくためにどういうことができるのでしょうか。

(田畑教諭)

ただいまの質問でございますが、本校の場合には、やはり学校で考えて、こういうことが大事だということで、先方側とご相談をして科目を決定していくということでございます。

(和泉委員)

ありがとうございました。

(小林委員)

塩尻志学館についての説明、誠にありがとうございました。

総合学科、今のお話をお聞きして、自ら単位を選択する力を持たせるために教師が一人一人のサポートをしてやらなければならない。それで納得して学習していく段階で、子どもは力を伸ばしていくのではないかというような説明ですが、そこに至るまでに2、3伺いたいと思います。参考1の一番先のところの1ページですが、普通科という欄ですが、将来の職業選択を視野に入れた職業教育が不十分と断定なさっていますが、これは志学館だけのことですか、それとも長野県では、このように考えておられるのか、県内各地商業科はどうだ、工業科はどうだ、その他のもいろいろあるわけでございます。

その辺のところ、もしこの志学館のものを活かすとすれば、この学校のいき方を出されていますので、そこを総合学科にするにはどんなことが大事なのかというようなことが、問題になっていくんじゃないかなと思います。

それからそのページの、総合学科の特徴というところですが、志学館になって総合学科を導入するに当たって従来と違った施設・設備の補充とか、「こういう点は、こんなふうにかかった」、こういう内容を入れたいためにいろいろなご説明、そこで子どもが学ぶ姿までありました。その範囲を広げた最初農業科ということでしたが、そのほか入れて今、工業は隣にあるからという話でしたけれども、その学科を取り入れた、狙い、願いというものの。

ということは、例えばこれからいろいろ議論をしなければいけないのですが、今ある学科だけで総合学科として先生が考えておられるかこれから問題になってくるとは思いますけれども、いろいろな学科というものを入れていかなければいけないし、もっと魅力あるようなふうにしていかなければいけないというふうになったときに、相当費用もかかるとは思いますし、その辺のことをお伺いしたい。

それから三点目として、総合学科にするために、職員の構成ということが大事なのでございますが、その職員というのもどんなふうに移動というか、構成というか、職員配置構成は多分どこも同じだとは思いますが、考慮した部分、あるいは新しく入れたという先生もおられるだろうし、多分一番は教師の充実ということが大事だと思うんです。先生方の意識転換で、「かなり苦勞してようやく三期生を送り出した」というような話になってきたんだというお話が先ほどありましたが、心の成長など、総合学科になったらすべて良くなるとは思いません。

その先ほどの説明がありました。一人一人を大事にするということですが、これは志学館だけの問題じゃないですね。小学校、中学、いやもっと幼稚園から一人一人ということはやっています。普通科という高校でも、一人一人の懐へ食い込んで、卒業させなければならない。大学の何部へ進むというときには、今の塩尻志学館と同じ悩みを持たなくてはいけないと思うんです。それを片方上がってくると片方が総体的に下がってきているような、大学でも、自分の希望するところに進めばいいやというふうにとらえられてしまうと、語弊があると思いますが、そこら辺も含めながら説明していただければありがたいと思っています。

今のお話は、総合学科にしたから成功したというのではなくて、高校にいる先生方が本気になって子ども一人一人を見つめ、この高校を何とか成功させようという、その熱意が

今のところにつながるのではないかと考えています。私自身はこの推進委員会に出させていただいて、これをそのそれぞれ名前の挙がった学校だけではなくて、長野県全体の高校のレベルアップになるのかなと考えています。

施設・設備は同じでもいいところを取り入れて、それぞれが進めて行きたいなとこんな気持ちでいたわけですが、またいろいろな面で点検して、いい面は取り入れ高校教育に役立つような方向でやっていただければなと、こんなふうに思っています。

意見を付け加えたご質問、よろしくお願いします。

(田畑教諭)

それではお答えしたいと思います。

まず1点目でございますが、1ページのその表にまとめさせていただいたのは、私もそう感じていることではございますが、これは別冊の参考資料を要約してこの表に示したもので、やはり国の考え方としてそういう認識を持っているということがここに記載されています。私も、それに対しましては、そういう位置付けであるかといふふうに思います。

それから普通科での職業教育、キャリア教育の構築でも、「総合的な学習という時間」というのが新しい教育課程でございまして、この教育課程から入ってきたものですが、総合学習については、いろいろな議論があるところですが、やはりそういうようなことを、どの学校にもやりなさいと国から要求されてきたという経緯については、やはりそういうことが必要ではないか、というふうに思います。

やはりこういう私どもの学校で行っていることはどこの学科、学校にでも必要なことだろうと私は認識をしております。

それから2点目の施設あるいは設備の面でございますが、総合学科に変えて新しい学習分野を足したのは福祉の部分です。これは今まで一切ありませんでしたので、先ほど見ていただいた、介護実習の施設も建物自体も新しくつくっていただいたということでございます。他の部分については塩尻高校からのものを引き継いでおります。多少改修をしていただいております。

それからみんなで集まる施設や、先ほどの社会人講師の話で、授業をやっている姿がありました。ああいうところが新しくつくっていただいたところです。科目の対応の点ですが、将来職業選択を視野に入れた学習がございまして、できれば多くの科目があればそれは良いことですが、しかし要点は進路を考えさせる、進路学習をきちんと行うということでありまして、それは農・工・商等全て揃っている必要はないと思います。それよりはむしろ大事なことは、キャリア教育をきちっとやっていく姿勢は農業しかなくとも、家庭科しかなくとも、それはそれなりにできるのではないかとこのように考えております。

それから3点目ですが、教員の問題ですが、これはやはり「産みの苦しみ」はありますが、しかし楽しいことではございます。やはり総合学科のシステムというのは、その学校の裁量が非常に濃いです。これをプラスに考えて「このような学校にしてゆきたい」というふうに思えばそれは可能ですので、そういう意味で、前からいた先生も新しく加わった先生も一緒になって総合学科を研究して、やってきたということでございます。

これはその学校を成功させるかしないかは、学校制度じゃなくて、どんな制度であっても、やっぱり先生方ががんばってやらなければ、私は駄目だというふうに考えています。

(飯島委員長)

ありがとうございました。

ほかに、ございますか。

(中沢委員)

志学館高校の今までの総合学科になってからの実績や、いろいろなことをおこなっているという話を以前からきいており、今日はそういう話を聞かせていただいて、大変参考になりました。そこで志学館高校の課題を聞きたいです。

先ほど先生の発表でも、教育的なものは完ぺきではないという話がありましたが、私もそうだと思うんですが、まず志学館高校としての課題をお教えいただきたい。

それからもうひとつは、課題に関係するかと思うんですが、8系列のものがありません。これも結局この系列を2年次あたりから選択していくと。その場合に一人一人希望し、進路というものを大事にしていくというときに、当然あるところに集中したり、あるところが逆に少なくなるというような差が出るんじゃないかと思いますが、そのときにどのように調整なり、あるいは生徒との話し合いをしているのか。その辺が大事な点であるし、難しいかなとも思います。

その2件について教えていただきたいと思います。

(田畑教諭)

はい。お答えいたします。

一点目のことですが、一番の課題は6年目に入りましたので、マンネリ化ということで。先ほど細かい技術的な課題は、5点についてまとめてお答えいたしましたけれども、やはり先生方が、つくられた当初の先生方がこれから入れ代わりをして、新しい先生方が入ってくるわけです。そうすると志学館は変わった学校だ、新しくなったからそれなりに、というようなことで、安住されてしまうと、ある種「怖い」と感じますので、やはり一番の課題は、常に新しいものを交えて改革をしていく。そういう姿勢が教員になればいけないということが一番の課題だと思います。

あと細かいことにつきましては、先ほど申し上げたとおりです。それから生徒によっては進路を変えるということがありますが、これは科目選択をするときに、「こういう教科はたくさん」、「こういう教科は少ない」と当然おこります。そのときに、2、3年次でも選択できるように設定しておりますので、今年は2年では閉講してしまうけれども、来年取れますよ。あるいは似通った講座を開講する場合がありますので、そういう場合には、「こちらのほうならできますよ」のというような調整をしながら、生徒の受講意欲を減少しないように工夫をしながら、ここのところは変更しますよというふうにして、開講科目等を調整します。

具体的な進路につきましては、それは生徒が思っている進路でありますので、これを「あっちにするかこっちにするか」という変更をさせることはできませんので、そういう形で生徒の犠牲が少ないような形で、科目選択をしているということでもあります。

(佐藤副委員長)

ちょっといいですか。

私は総合学科高の設立に関しては、非常に疑問的なところがあるのですが、今ちょっとお聞きしたいことは、文科系はカリキュラムが多彩ですよ。そういう中で、限られた時間の中で、いわゆる基礎科目ですね。そういうものとの関連で、限られた時間の中でこれだけ多彩なことをやりながら、基礎学力の点は全然心配ないのか。

実はこの基礎学力というか、今日のこの成功例の中で示されている学力という問題は抜け落ちているというか、目に見えない状態になるから、例えば国立大学に何人行ったとか、そういうことが、ある意味指標になるかと思うのですが。基礎学力が今、非常に低下しているということが叫ばれている中で、大切な職業意識を植え付ける以前の問題として、基礎学力はどのように考えているのか、先生のお考えをお聞きします。

(田畑教諭)

基礎学力の問題ですが、これは総合学科に限ったことではなく、どの学科においても今、そういう問題があると思うんです。先ほど申し上げましたように、まずモチベーションというのは基礎学力と同時に必要だということです。それから先ほど申し上げましたように、総合学科は必修科目と選択科目の配分は、学校独自で決定できますので、2年、3年でどの英語や数学や国語が必要だと思えば、全員が履修が必要だと思えば、そういう設定もできるようなシステムが総合学科です。

ですからそれは学校の判断として、どういう方向でやっていけばいいのかということをお話し合ったときに決められることでありますので、基礎学力の不足につきましては、そういうカリキュラムの編成で対応できるのかと思っています。

本校の現状でいきますと、国語 や英語 など2年で履修する科目ですが、というものを設置しておかなくても、やはり1年生の段階で進路学習をするときに、国語とか数学、英語は進路にとって必要なら取らなければいけないという認識ですので、特別にきちんとカリキュラム上必修にしておかなくても、ほとんどの生徒がそういう科目を履修しています。

ですので、現状としてはこのようになっております。

(原 委員)

お願いします。

私は以前から、総合学科について関心を持っております。それはご報告の中にありましたが、普通教育、専門教育を施すという視点ですね。これは学校教育法の41条の規定に載っております。高校教育が目指すべき、大きな目標なんですね。そういう点で、総合学科に興味、関心を持ち続けているのですが、そこで質問ですけど、系列が置かれており、そしてしかし原則的にはすべての科目を自由に選べるということになりますね。

そうした場合に、いわゆる普通科にかかわる科目、職業教育、専門教育にかかわる科目、2つあって、それを全く自由に選ぶんですね。そのときに例えば1年生から2年生になる、2年生から3年生に進級する、一方では具体的に進路の問題を抱え込む。「どこかの大学に進学したい」というときに、その掲げられた普通教育、専門教育という、考えられるバラ

ンスを崩して、普通教育に傾斜していく、そういうことはないでしょうか。ということが質問の一点目であります。

それから二点目は、これは県もそうですけれども、都道府県で第1号につくられる総合学科というのは非常に厚い手当てを受けるわけですね。教員加配などですね。ですから、そういうことがお触れになっていませんので、教員加配と諸条件、志学館ではどうだったかということについてお尋ねします。

三点目は、総合学科の第1号志学館がスタートすると同時に、この学校については学区が取り払われましたね。全県から進学できるように対応したわけです。ですから今、どのくらいの地域からこの塩尻に通われているのか、それをお願いしたいと思います。

以上です。

(小林委員)

関連をお願いします。

今の通学範囲ですが、この3年間どんなふうに変ったか、変わらないか。それも総合学科に対する評価のひとつになると思うので、入学者ではなく志望者をお願いします。

(田畑教諭)

はい、それではお答えいたします。

一点目の答えですが、普通科と職業科目のバランスの問題ですが、これは最終的には生徒、一人一人の考え方になりますので、それに影響されます。今、大学に入るためには、必ずしも一般入試だけではありません。いろいろな入試制度というものがありますので、必ずしも大学をねらうために普通科目ばかり取らなければいけないという時代ではありません。

本校の問題で考えますと、一般受験で行くよりは、AOとか推薦で行く人間が多い状況です。これらの生徒たちは、専門科目をしっかり勉強します。そういうことで、同じ大学へ行くにも、いろいろなルートが今ありますので、私はどこで勝負をするかということを考えるんですね。そういう意味で結果として今年は普通科目系が多いなという場合もありますし、今年は案外農業、商業の系統をたくさんとっているなというところもあります。それはやはりその年度年度によって変わってきます。

これは生徒の、私はどこで勝負するのだという、そういうところに非常に影響されるといふふうに思います。それから職業科目、大体専門高校でいきますと、今ですと26単位ぐらい履修しますね。本校では、ほんとに専門科目を一生懸命やりたいと履修する子は、30単位を取っています。ですので個人個人で見れば、やはり専門科目を集中的に勉強したという子は、専門学科以上の履修単位数を履修している場合もあります。

それから本校へ志望する生徒ですけれども、これは「私は職業科へ行くのは絶対やだ」と言っている生徒も本校へ入ってきて、職業科目を取るんですね。それはなぜかという、普通科に行ってしまうと、職業教育を受けることがなかったことが、総合学科に入ってきたことによって、「産業社会と人間」という科目でガイダンスを受けると、「こういう教科のこういう科目を勉強すると、こういうふうになるんだな」ということが分かった、やはり普通科ではなくて、そちらの方向の系統をとる場合もあります。

ですので、「私は普通科しか受けない」と言っていた生徒が本校に入ってきてガイダンスを受けると、「やはり農業の勉強も大事だ」と農業系列をとる生徒が出てきます。そういうところがありますので、ひとえにどちらかになってしまうという問題でもないというところがあります。

教員の加配についての質問であります。これは私の立場では細かいところは良く分かりません。しかし職業科のときには、加配されますね。工業科が1クラス何人とか、というのがあります。

総合学科にも加配があると思うんです。それがどういうふうに入れ替わったかというのを、ちょっと私の立場では分かりません。その辺は、それぞれの立場からとらえておいていただいたほうがよろしいかと思います。

普通科に比べれば加配はあろうかと思います。それがどれだけなのかは私はちょっと答えられません。

それから通学範囲の問題であります。学校要覧の24ページに大まかなことが出ています。現在在籍している生徒がどの範囲から通学しているのかということをお分かりいただけたらと思います。

先ほど申し上げました中学生の体験入学ですが、今年度の場合は長野市や須坂市、それから臼田町（現佐久市）飯田等からもまいります。それから志願者ですが、やはり同じ傾向です。今申し上げた学校要覧に出ている通学範囲とほぼ同様の範囲であると思います。また在校生のほうのデータもほぼ同じ様子でございます。

そんなところでございます。

（荻原委員）

大変なメリットというか、非常にいい学校だと思いますが、それが今回この4通学区が塩尻志学館高校が置かれています。1校先行しているもので、今度できないわけですね。総合学科を新たに転換しないという方針ですが、そういうことに関して例えばこの学区は大町から木曽まで、ものすごい広いわけです。上田、佐久よりは、佐久のほうがまだ距離的には短いですが、そういった総合学科のいい面を成果として挙げながら、大北とか木曽とか、そういうところに波及しないのか。それは県の方針でやらいろいろな問題があるのか。だけどこれだけいい学校というイメージが、あるわけですから、そういった声が例えば先生方、あるいは校長先生、地元の方々というところからは、もう一校つくってもいいのではないかなというような声が上がらないものですか。

（飯島委員長）

お答えにくいかもしれませんが、お答えできる範囲でどうぞ。

（田畑教諭）

その辺の所は、現在推進委員会で審議をしております、そちらのほうでやるべきことだと私は思います。

塩尻志学館のこの実績を、あちらこちらで来て説明してもらいたいとか、見学したいという学校はたくさんございます。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

(西村委員)

今、荻原委員のご質問に関して、田畑さんがお話になったように、それぞれの推進委員会で、もし2つずつとなれば、そういった答申をそれぞれの推進委員会が出してくると思います。それから志学館もそうですし、最初に多部制・単位制についてもご説明がございました。我々委員の中で、ある程度イメージが重なってきたのではないかとと思っています。

そんな中でずっと気になっていたことがあります。佐藤委員からの指摘で基礎学力についていろいろ議論をしましたが、最終的にはやっぱり勉強に対するモチベーションですね。生徒が、どうやって勉強したいモチベーションを自分で持つかです。それがこの志学館のやり方、多部制・単位制のやり方で、ひとつの方向性を出していると思うのです。

というのは強制的に、自分で考え、自分でこうしなきゃという自覚が与えられるんです。教職員がどうやってそのモチベーションを生徒に持たせるのかというのが、多分私どもの勉強することであると、今回痛感いたしました。

今日の説明で本当によくわかりました。

(太田委員)

どうもありがとうございました。

実際にお聞ききして、理解が深まりました。先生のお話では、塩尻志学館高校は9%の就職率ということですから、ほぼ進学校という言い方のほうが適切ではないかと思います。この点いかがでしょうか。

(田畑教諭)

確かに大学へ行く生徒の数が増えたとかそういうことで、よく進学校化したのではないかというふうに言われるのことがあります。私は先ほども、本校の教育目標は「こういうところですよ」と申し上げましたが、進学しろ、しろという、そういう指導はしているわけではありません。

これは先ほど申し上げましたように、進路学習の中で生徒がやっぱり「上」と連動しなきゃ駄目だと思っていくんですね。それは今、職業高校でもほとんど進学ですね。色々な工業高校、農業高校、商業高校ありますが、昔の職業高校と変わって、今職業高校でも、7割8割進学する状態です。ですから志学館だけが進学校化しちゃったという、そういうことではないと思います。

(太田委員)

企業が今求めるのは、専門性が高く、即戦力になる人材です。多くの企業は縮小均衡策により多くの従業員を削減しています。このためきめ細かな指導をおこなう余裕がなくなってきていますので、即戦力となる人材を求めざるをえません。中途採用を主にしている企業が増えたのはこのためです。また、採用効率、費用と効果、リスク回避等の観点から目的意識をもって学習してきた学生を優先して採用しています。

総合学科制の履修科目の選択に自由裁量権をもたせる方法は、必然的に専門性がおちることとなると思われますので、9%の就職者はどのような業界に行っているのか、お聞きしたいのですが。

（田畑教諭）

就職していく生徒については、特定の業種に偏る傾向はありません。自分のやりたい分野を調べ試験を受け就職します。それから専門教育についての考え方としては、専門学科と違うところは、本校ではきちんとキャリア教育をして、私はこういう専門教育を受けたいということを、きちんと納得して、専門教育に入る。ほかの専門学科では、中学を卒業してすぐ学校選択をしますので、私は別にこの職業教育科目を受けたくないと思っている生徒もいや応なく受けるということが専門学科の場合あります。ですので、私はよく生徒に言うのですが、農業の科目を取ったら農業高校と変わらない教育を本校ではやっているんですよというふうに説明します。

ですので、どの段階で職業教育に入るかは変わりますが、入ってしまえば私はその専門教育は教育できる。ワインのことでさえそうですし、ワインの産業、塩尻では大事ですけれども、ワインの会社へ就職して活躍している人を総合学科になっても送り出しています。それはやはり塩尻市の主な産業を勉強して、「私が塩尻市のワインを守っていく」というモチベーションを持つんです。

そこで職業教育に入りますので、それは我々から見ると、授業を受けている生徒は、非常に目を輝かして、非常にやりやすい。そういう実態があります。

専門教育のもうひとつの考え方は、今、どこの専門学科も、多くが進学しますね。それは完結した教育ではないという考え方です。やはり今の専門性というのは、かなり高度化していますので、高校生の段階のみでは確立できない。やはり上に行って、力をつけなくてはいけないという時代でもあります。そういう面からして、私が総合学科の専門教育がほかの専門学科と比べて劣るということは感じておりません。

以上です。

（太田委員）

昔からの農業科の先生もいらっしゃると思いますが、農業が停滞している中で、農業に関する科目は人気がないのではないかと思います。このため履修を希望する生徒がなくて、授業にならないとか、先生のモラル（勤労意識）が落ち込んでしまうのではないかと心配です。

また、昔の農業科の先生は、地元の農家の皆さんと交流を深め、農業指導をするなど広範囲に活動されていたと記憶しています。このように過去には実績をあげた農業科が、今どのようになっているのか、実態はどうなっているのか、お話していただければと思います。

(田畑教諭)

はい。

今、総合学科 1 本になっておりますので、いわゆる「農業科」という学科はありません。ですので系列という話をしましたが、農業科の学習内容を引き継いでいるのは、「環境科学系列」というのと「食品科学系列」です。それが昔の農業科の学習内容を引き継いでいるものです。

ですので、その勉強をしたい生徒は、その系列の科目を選択しているということであります。それから大学へ何人も入れる、入っている、特に総合学科になってから進学校化したと言われますが、普通科系列のみではなく職業科系列の子も進学はします。国公立大へ入る約半分は農業系列を選択した生徒です。

これが現状です。

(太田委員)

第 2 通学区は丸子実業高校が候補にあがっています。この学校の例えば商業科などは、専門性も高く、優秀な生徒を産業界に送りだし、その道の専門家としても実績をあげられている方が多いと思っています。丸子実業高校が、例えば総合学科制に転換したとして、専門性をおとさないでいける方法があるのか、うまいやり方があるのか、ご意見をお聞きたいのですが。

(田畑教諭)

専門学科と違うところは、科目を選んでいくわけですので、専門教育を引き継いで成功させるためには、必要な科目をまず配置することですね。カリキュラムに必要な選択科目をきちんと置いておく。そして生徒が選択できるような配置をしなければいけない。配置をすることですね。

それから例えば商業で専門的な道を目指すのであれば、この科目はきちっと段階的に履修をしていきなさいよというガイダンス、この 3 つをきちっとやれば、それは専門的な学習はできると思います。

(太田委員)

最後にもう一点お願いします。

素朴な質問で申し訳ありませんが、塩尻志学館高校は実質的には進学校であると思います。履修学科の選択性が本人にあるということであれば、進学に必要な授業を重点に選択するでしょうし、このような授業には真剣になるかと思いますが、反面、試験に無関係な授業への学習意欲は落ちてきてしまうことにならないかと思うのですが。

(田畑教諭)

まあ「内職」をするということはあまりないですね。たまにやる生徒もいますけどね。それからちょっと先ほど少し触れましたが、国語とか数学というのも、やはり子どもがどういう目的を持っているかですね。数学でも、国公立大学に行くんだったら数学の まで学習しなければいけないというのがありますので、選択科目でもいろいろ工夫しています。

ただ単に受験科目といっても、進路先によって選択科目が多少変わってくるため。そこでまた考えるということになってくるのが現状です。

（太田委員）

ありがとうございました。

（佐藤副委員長）

佐久の技術専門学校を活用したという話、それから私の経験上、大学で教えていたということもありましてその中で、基礎学力が全然ついてないうえに、余計な雑学がいっぱい入っているので実際にはなかなか大学の授業についていけないわけです。

ですから私は高等学校は、基礎学力を充実させる、これが大切じゃないかなと考えていたわけです。ところがそういう話のある高等学校の先生にしたところ、それは正論けれども、実際に基礎学力だけを教えていたのでは、もうじっと座っているだけでどうしようもない生徒もいる。その学生に対して、こういうものを用意したんだと、私はそういう意味で総合学科というのは理解しています。

ただ長野県は4つの通学区で塩尻志学館も数えれば4校もつくってしまうわけですね。こんなに幾つもつくってしまっているのかな。よその県は、一体こういう試みはあるのかどうか、その辺私は心配しています。ですから成功した例がありますけれども、これは先ほど来質問がありますように、かなり広域の中で考えている。このような1ブロックの中で考えていてもいいかな。そういうことで私は心配しています。

（芹澤委員）

事務局へお伺いしますが、この総合学科をつくるために、人件費を含め予算はどれくらい、施設・建物を含めて幾らかかりましたか。

（飯島委員長）

事務局お願いします。

（篠原教育幹）

申し訳ありません、総額というのは今すぐ分かりませんので、また調べますのでお願いします。

（芹澤委員）

それでこの総合学科には、基本的にどれぐらいの予算をかけるというか、そんな計画はお持ちですか。

（篠原教育幹）

すみません。現在のところまだそういったところまで、詳しくしてございません。

(芹澤委員)

はい、分かりました。

(飯島委員長)

前半、質疑でということを冒頭申し上げましたが、その時間が過ぎてしまいました。現場の先生でなければお答えできないような質問が、もしございましたらどうぞ。

(西村委員)

全国状況ですが、総合学科につきましては、各県とも 5,6 校あります。長野県の 1 校は少ないのが現状です。

(柳澤教育主幹)

全国の様子でございますが、前に全国の設置状況について資料をお出ししたと思います。現在 250 校ぐらい全国で総合学科ができています。また今年度に行きところの 40 数校となっており増加傾向にあると思います。

(飯島委員長)

よろしいでしょうか。

それでは、田畑先生、長時間にわたりありがとうございました。

では、中間の休みにしたいと思います。後ろの時計で 10 分間、休憩をしたいと思います。

よろしくお願いします。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

それでは、休憩前に引き続き再開させていただきます。前半は、多部制・単位制について事務局から、そして総合学科につきましては志学館高校の田畑先生から説明をいただきました。ある程度皆さんの認識が共通になってきたのではないかなという感じがしなくてもありませんが、ただまだここは委員の皆さまの議論をお願いしたいと思います。

委員会を再開する前に委員の皆さんの中で、新聞とかその他の情報をお持ちのかたもいるかと思っています。あれば、紹介いただきたいのですか、なければ議事を進めたいと思います。よろしいでしょうか。

それでは委員会を続けさせていただきます。

何回目かの委員会で荻原委員がおっしゃったと思いますが、「出口の部分で生徒や保護者にとっての魅力になるような価値をつけたもの」これが魅力ある学校づくりだという話をしてあります。

私の持論で言えば、魅力ある学校づくりというのがひょっとすると先ほどの志学館高校の先生の話でもありますように、「魅力ある教師」づくりにつけるような気がするんですけども、それを言ってしまうとこの委員会が終わってしまいますから、先生方の魅力というものは、県教委や、それから先生方自身にお任せして、私たちはいかにそういう魅力あ

る環境づくりを支援していくかを考えることだろうと思います。

その辺のところ、この後もご意見をいただきたいと思いますが、そろそろ県教委から私たちが当委員会を設置した所掌事項の一つである多部制・単位制あるいは総合学科、それを設置していく方向でいいのか悪いのかという意見のほうに移していきたいなと思うのです。よろしくどうぞご意見をお願いします。

(原 委員)

お願いします。

実はこの会場で3日ほど前、東信の定時制・通信制の生徒の生活体験発表大会がございました。定時制・通信制の生徒にとって大変大きな行事で、長く進めてきている行事であります。

今回もその生徒の発表を聞いていて、なぜ定時制に、例えば野沢南の定時制に入ったと。なぜ上田千曲の定時制ではないのかなど、多様に語られました。いずれもさまざまな生活履歴、あるいは学習履歴があり、そして少人数のこの学校へ来て本当によかったと。こういう事柄が異口同音に書かれていたのが印象的でありました。

つまり今、不登校をはじめさまざまな事柄を抱え込んでいる生徒が統計上の数字以外にも随分あるわけでありまして、そういう青年たちが、定時制を選んで来ているわけであります。つまり言葉でよく語られますが、定時制はセーフティーネットそのものであります。

しかるに今回の計画を見ますと、出されている資料の一番最後の定通課程の再編整備の概要が図に入っているわけですが、これを見れば一目瞭然(りょうぜん)で、多部制・単位制をつくること、すなわち今日の定通制の統廃合と完全にセットになっております。私は、多部制・単位制そのものの意義を全く否定しているわけではありません。

しかしこうしたセットで考えられて、非常に大きな疑問を持っているわけであります。前回出されている具体的な校名を挙げての再編整備の、いわば説明ですね。その中に、こういうくだりがあります。7 ページであります。ここは上田千曲、上田高校の定時制と野沢南、坂城の再編という表題のついているところでありまして、坂城の問題も新聞報道等する中で聞きすると、第1通学区ではかなり異論が出されているようでありますが、それはもっともですね。その事務局が作られた文書の総括の中に、定時制に通う生徒は多様化しており、夜間部だけでなく通えない生徒は減少傾向にあるというくだりがあります。

これはこのように記述するデータがあるか。私はこれら膨大に出された資料を見ましたが、全くありません。そうではないですね。先ほど私が冒頭に申し上げているように、この夜間部の少人数を選んで来ている、そこでなければ通えない。もちろん、これからその昼間定時制の方が具合がいいと、そのほうがいいと、そういうふうに考える若者や先生たちもいるでしょうけど、夜間部でなければ入れない生徒が減少傾向であるという、こういうことは、これは多部制・単位制を導き出すための、つまりその結論のための記述であって、そういうデータがないというわけに思うわけですね。

それからここは、どういうふうに理解したらいいのでしょうか。そのひとつ下の表ですが、地理的な状況うんぬんという文章があります。上田千曲と上田高校を坂城に統合する。それから第4通学区に設置される多部制・単位制の野沢南も、選択肢のひとつとしていることは考えられる。つまり上田地区の2校は坂城へ行くんだが、野沢南も選択肢のひとつだ

という、こういう書き方をされているわけですね。

と、お書きになりながら 8 ページを見てみますと、最後のページですが近隣校の状況というところですね。この第 6 区の小諸商業には定時制が併設されているが、距離的に坂城高校および野沢南高校と離れていることから、引き続き定時制を設置していく。つまり小諸と野沢南を離れているという認識を、ここでは書かれているわけです。それより小諸よりも、はるか遠くとは言いませんが、上田からは選択肢、これは大変な矛盾ではないでしょうか。

つまり野沢南の多部制・単位制をつくるという、どこから持ってきたか知りませんが、そうした結論を最初に置いて、そのための書き方をなさっていると、というふうに私は勘案するわけであります。これについては、当然異論があると思いますが、それについてもお伺いしたいというふうに思います。

多部制・単位制、及び夜間定時の統廃合についてのみ発言します。

（飯島委員長）

表現のことですが、事務局お願いします。

（柳澤教育主幹）

いろいろな取り方はあるかと思いますが、かつてのような、いわゆる働きながらという「勤労青少年」のための学びの場かという位置づけから大きく変わってきているという現実であるというのは資料等でもお出ししてきたと思います。そういうことからしますと、入学時点で就職をして、昼間働かなければならないという、いわゆる勤労青少年の通学につきましては、大変減少してきているという状況がございます。

従って今、昼間部といいますか多部制・単位制の高校、好きな時間帯に出られるというふうになりますと、そういうことを選択してくる生徒さんもかなり多く出てくるのではないかと。こういうような意味合いで考えております。

また先ほどの野沢南も選択肢のひとつということではありますが、これも学ぶ時間帯を午前部だけとか午後だけとか、そういうことも選べるわけでありますので、それぞれどこに住んでいるかということによろうかと思えますけれども、さまざまな事情に合わせることもできるということで当然選択肢のひとつと、そういう意味合いでございます。

また最後のところの記述のところでご質問がございましたが、そのことに関連してでございますが、やはりそうは言いましても、昼間働かなければならないという方のために、夜間の定時制もすべて統合ということなくて、東信地区ではお示した所に現状のタイプの定時制を存続していく必要があるのではないか、ということでございます。

（飯島委員長）

どうでしょうか、よろしいですか。

(荻原委員)

私も、原委員さんのお話のように、最初の結論ありきというのがやっぱり県教委の姿勢じゃないかと、基本的にその不信感がありますけれども、最終報告の中にも、高校進学率27%、地理的条件によるしわよせがないように、各区の交通事情、地域特性を考えるとという前提があるわけですが、そういう中で地域校という言い方がありますけれども、第5区では地域校じゃないわけですね。実態的には。

それで主に第6区に地域校といわれる望月、蓼科、小海、軽井沢は入るんですね。そういう格好になっていて、その救いというのは最終的には地域校に対しては、2クラス以上でいいんだとか、ほかのところは5.5クラス以上あるいは6クラス以上というような指針が出ているわけですが、そういう中で総合学科になる丸子実業は、先ほど話を聞けば普通校減ですよ。実質的には。

そうすると佐久には総合学科ができませんので、実際に通うなら小諸の近辺の配置を考えれば普通科は減ると。旧6通学区では普通科の定員が減ると考えざるを得ない。そうするとそれこそこの旧6通学区の中卒者は、そこへきて野沢南が多部制・単位制に転換すれば、これは普通高校ではないと考えざるを得ないですね。いろいろな学習歴あるいはそういった目的としては受け入れ学校というイメージがあるわけですが、そういうことで旧5と旧6と考えると、不公平へといったらなんですが選択肢が狭まられるのではと思われるます。

そういった意味で、中学の卒業者の分析やクラス数は旧6通学区でやっていて、その多部制・単位制あるいは、総合学科の設定に関しては、これを合わせた第2通学区で考えてるわけですよ。そういう意味では、最初の趣旨と90何パーセントいつている中学生の選択肢を広げるなど柔軟的な高校教育をするんだということとは、ちょっと矛盾があると思っています。

そういう中で最終報告をもう一回見たところ、例えば丸子実が旧5通学区になるわけですが、それを2校認めて、じゃあ次は佐久にどこに配置するということを考えるのか。そういった表現をしているわけですが、また2校削減で1校は多部制・単位制を取らないと、もう1校減らせよという文章になっているわけですが、そういう中でまた上田市、小諸市、佐久市、その冒頭再配置の論議してもよろしいかというようなものがあって非常にそういう意味では対案が出しづらい格好で設定されているわけです。

そういう矛盾を考えると、どうも私もほぼ結論ありきで実際的にその教委は、項目はいいですが、実際的にはそういった格好で規定方針を揃えてある日突然やるというんじゃないかとちょっと危惧しているわけです。

最初に戻って申し訳ないですが、やはりその今度の多部制・単位制は、この最終報告にある向学心養成学校という役目が非常に強いと。例えば反対に進学対応というようなところには、進学専門、言ってみれば4大国立、私立難関校向け単位制進学校という選択もこ「最終報告書」に項目にあるわけですが、実際にはそちらの方ではなく、上も下もなくて中間のほうのものに対しては、この地域での中間の部分だと私は思っていますので、それを急に多部制・単位制に転換してあとは近隣の学校へ行きなさいというのは、ちょっと無謀だと思うんです。

基本的に県教委の姿勢に関して、近隣の状況等いろいろなことを言いますが、どうもそ

の辺が一番私にとっては何を言っても意味がなく、言わなくてもいいんじゃないというような、そういう前提にならざるを得ないと。そのような無力感があるわけですがけれども、そういうことに対して地域校の問題、あと5区、6区の問題、その辺についてちょっと見解を述べていただければと思います。

（飯島委員長）

また何か、何回か前の委員会にタイムスリップしたような感じがするんですが、私は最終報告案をいろいろ読ませていただきました。そして第5と第6の生徒数の差が約200名です。それは210とか端数はありますが、大体200名です。そうすると普通校の1校分。その人数の差が、ここが第5と第6の学校数は6と11。

ここで佐久地方の高校が200名と生徒数は多いです。ですから佐久地方が学校数が多いのはしょうがないと。しかも地域校があります。でもそこで私も県教委の学級数を第5は今7.67学級だったのが6学級くらいになってしまう。

ところが佐久地方は4.6ぐらい、それが3クラスだけになってしまう。その辺のところが非常に私は大事だと思います。私も県教委のデータだけではなくて、インターネットでちょっと調べてみまして。普通学校学級数別比較表というので、『高等学校標準校に基づく職業別配置校数の目安』というのがあります。

いわゆる1学年に何学級あるかによって、校長さん、教頭さん、教員、あるいは養護、それからその他のいろいろなもの数値が大体この辺になりますよという一覧表があるんですね。そうしますと、1学年に3学級しかない高校においては、校長1、教頭1、教員19、養護1、実習教師1、事務職2、25名しか教員が配置できないような、基本的な配置となります。

ところが県教委が示している6学級になりますと、45名の先生が配置。この辺のところがひとつ大きな問題と。それプラス開設学科。いわゆる科目ですね。これが3学級しかできないとか、34学科しか開設できない。ところが6学級だと47学科。

もうひとつ、もっとも子どもたちにとって大事なものは、部活の平均数。さっきの3学級だと11ぐらいの数しかない。ところが6学級だと30の部活になります。例えば野球だとかサッカーだとか人数が必要種目はできなくなってしまう。そういうところの部活がどんどんなくなっていってしまう。そういうことを含めて、やっぱり適正規模というのが大事だなというふうには感じているんです。

そうしますとその辺から佐久地方が11の学校がある中で、200しか第5と第6の差がない現状ですが何年か後に430人ぐらいの子どもたちが減っていってしまうと考えると、データどおり1学年3クラス台になっていってしまう。やはりそれは回避してあげるほうが、子どもたち、生徒たちのためではないのかということを、数字の上ですけども見て取ったわけです。

ただそれが今出ている野沢南高を廃止するとかという話とは別問題として、全体の佐久地方の学校数をどこを減らすかによって、子どもたちが理解しやすい、部活をエンジョイできるという学校づくりをする。と、いうのは、この委員会の役目のような気がしているわけです。

そんなところから、もしご意見をいただければというふうに思っています。

(太田委員)

他部制、単位制高校の事例をいただいたのですが、このような学校方式を取り入れることは素晴らしいことだと思います。これは「魅力ある高校」にふさわしい学校になるのではないのでしょうか。

特に、門戸を地域に開放し、生涯学習講座等を高齢者も受講できるような学校づくりができれば、これから本格的に高齢化を迎える長野県として、ニーズは高く、時代の要求に応えるものであり、大歓迎いたします。

それから、上田、佐久地区には外国人の方がたくさん働いています。今、これらの外国人を支援しているのは民間のボランティア組織が中心となっています。この学校が外国人にも門戸を開放し、受け皿になっていただければ、国際化のために大きな役割を担うことで、さらに素晴らしい学校価値が生み出されるのではないのでしょうか。

このような目的を実現できる学校づくりのためには、場所をどこにもっていくか、重要なカギとなると思います。お年よりが、第1通学区で候補になっている坂城高校まで電車に乗って行くことは大変ですし、上田の定時制高校に通学している勤労学生にはもっと大変になると思います。外国人にとっても同じことです。

この学校の設置の場所は、お客様の多い、「誰でも何時でも」通学できることが可能な、利便性の良さが重要です。

このようなことから考えますと、やはり上田市に設置すべきではないのでしょうか。それも上田の駅前に立派なビルが建てられていますが、これを学校でお借りするなり、新たな投資をこの学校づくりのためにおこなっていくということも必要ではないかと思います。また、上田市の既存の高校に併設することも選択肢だと思います。

お客様からみて交通の便の悪い、坂城高校や、野沢南高校を多部制・単位制高校に転換する事務局案はそもそもの発想に間違いがあるのではないのでしょうか。大変疑問を感じています。

また、話は違ってきますが、事務局の改革プランの各案における対象高校の確定理由の説明には、「利便性」という言葉は出てきますが、「コスト」とか「効率性」という言葉は一つも出てきていません。

今民間企業では、バブル崩壊後の再構築策、縮小均衡策により、従業員をできる限り絞ってきており、このため多くの会社は、「大部屋化」、「フラット化」、「多能工化」をすすめてきています。人を有効活用するために組織の垣根を取っ払い、意思決定をスピーディーにおこなうために上下の階層を少なくし、少ない人間で多品種、少量生産に対応するために多能工を育てています。

前にも申し上げましたが、間接部門の合理化もすすんでいます。間接部門の人間は、どこの企業でもバブル期の三分の一程度に減らしているはずです。取締役の人数も、当社の例でも、三分の一以下になっています。

高校の経営についても、二校を統合すれば、事務方の半分は無理としても、かなりの人数を削減できるはずです。先生の大部屋化ができれば、先生の活用度が高まり、教育の効率性があがることになります。

野沢南高校が多部制・単位制高校への転換候補と上げられていますが、当事者の皆さんは「何で私達の学校が」という気持ちで、納得がいかないのではないかと思います。例えば

野沢北高校と統合し、新たな理念を掲げて、新たな学校づくりをしていけば、南高校としての存在価値が継続して生き続けることになりませんか。

高校改革については、このような視点からも論議する必要があると考えています。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

そういう具体的な形は、当然この後検討していかなければいけないと思うんです。例えばさっき佐藤委員からも出ましたが、全部が対象校だよという話がございましたように、いざこの第2通で多部制・単位制、総合学科のこの案を県教委のものというような形で受け入れていこうという話になった場合には、今度どこにしようかという話は、この後、今、太田委員が発言しましたように、原案では野沢南が多部制・単位制になっていますが、上田方面にもほしいという話になれば意見も十分討議したあと、じゃあそこをどこにするんだと。

あるいは今おっしゃったように、駅前にもという話もこの案の中に出していくかどうか。ですからまず全体としてこの多部制・単位制、総合学科という計画に添って作っていくということで、まずは意見を確認しないと、じゃあどこへつくろうなんて話のように先にいかないと思うんですが、その辺はいかがでしょうか。

（小林委員）

先ほど塩尻志学館のお話を伺ってなるほどと思い考えてまいりました。

そういうことで、多部制・単位制ということを考えてみましたときに、まだ私自身の心の中にマイナス思考があります。今、ご発言がありましたのも、多分そうではないかと、こんなことを思ってわけです。

大変だな、困ったなという気持ちだと思いますが、この多部制・単位制というのをもっと遠くても行きたいなという魅力ある高校にする。その中身を膨らませて考えていくことが大事なのではないのかなと、こんなふうに思います。

例えば情報科みたいなものをやるとか、総合学制的な内容を取り込んだ多部制・単位制。それから隣接高校の支援、地域の支援というのを具体的な、こんなことが考えられるんじゃないかというような、例えば今出ている野沢南のとすれば、こんなことが考えられて、ひとつのモデルみたいなものを地元でお考えいただければ分かりやすいと思いますけれども、これは大変だろうから。

ただ今、話題になっています第2通きりで結論が出るかどうか、県教委のほうとすれば第1通の坂城をという案で、第1通を考えておられるけれども、ことによっては今、太田委員がおっしゃったように上田のほうへ移るかもしれない。これから高校名は今議論でどうなるか分かりませんが、もっと多部制・単位制、この今日資料で出されましたものは全部普通科ですけれども、この普通科の中身を先ほど最初に私が、この考え方は大変いいかということで質問とともにお話ししましたけれども、そういう中身をもっと練って行く必要があると思います。

それから学校に来られない生徒たち、今までそういうことができなかった生徒にも、共同生活。そういうコースも、あるいはそういう教科といいますか、学科といいますか、そ

ういうものもつくと。それから体を少し動かすような場面をつくるとかいうことで、普通科という内容をやっているのが今、私たちの頭で特に定時制というのを中心に考えているので、ちょっとその殻を破るような、何か夢のあるような、魅力ある高校というものを、私たちでまた話し合っていかなければいけないのではないかと、こんなことを思っています。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

（佐藤副委員長）

多部制・単位制の話ですが、私は前々から言ってきたように、特に多部制・単位制に通う生徒の層を見ますと、ただ定時制の学生、それから先ほど説明からあらゆる年代を超えて学べるということですが、いずれにしても定時制の場合を想定しますと、何らかの方法で通うのが非常に困難な生徒が学ぶ学校というようなイメージがどうしてもあります。

そういう中で、先ほど静岡県立の中央高校の例で、成功しているというお話がございましたが、これもある意味では静岡市の真ん中にあるわけですから、立地する場所というのが非常に大切ではないかなと思います。

ですから今、たまたま野沢南という名前が出ていますが、野沢を想定するよりも、私も先ほど太田さんがおっしゃられたような、むしろ上田を中心に少し考えたらいかがかなと、思います。

それから先ほど、委員長のほうから学校の適正規模というのは非常に大切だという話がありましたが、私も同様でございます。そういう中でひとつだけ、私も検討委員会の「最終報告書」を読んでみながら、そういうものを対象とするためには、連携型県立高校というのが挙がっております。

こういうような形で、高校と高校が連携して、先ほどのクラブ活動とか、あるいは教員の指導の専門性とか、そういうものを連結した高校である程度解消できるとすれば、そういうようなものも新たに考えたほうがいいんじゃないかなと、考えております。

県教委で最初に2通で、2つは絶対削減だよというのは、それに匹敵するようないい案があれば当然出してくださいということでこの委員会は始まっているわけですね。そんな中で先ほど出た例えば上田の問題、それから連結する高校、このようなものも考えた中で、あるいは学校運営の経費の問題なども考えた上で、それに似合うような案があるとすれば、そういう案を考えてやったほうがいいと思います。

とにかくまとめてしまうということは、非常に難しいですね、議論していきますと。本来特に多部制・単位制の定時制の問題などは、一カ所にまとめてしまうというのは非常に無理があると最初から感じています。

坂城高校は、既に議論に上がっているわけですね。そうすると最初私が多部制・単位制、特に定時制の問題は坂城高校であるならば、上田千曲と上田はそちらのほうで吸収できるかなというような話をしたと思うんですが、またその前提が崩れてしまう可能性もあるわけですね。

そういうような中で、多部制・単位制というのは慎重に考えていかなければいけないん

じゃないかなと、今考えております。

（中沢委員）

今、佐藤委員がおっしゃったことに関係することなんですが、ひとつにはさっきの原委員さんの定時制の関連もあるのですが、県教委案で定時制の関係で上田の、上田高校、上田千曲高校、これをなくしていく方向が示されましたね。その前提は、ここに説明があるとおり、多部制・単位制が坂城ということが全体に出てくるんですね。上田からは通える範囲。

しかし先ほどの話は、佐藤委員さんが言ったように、坂城高校について1区では、一番最南端。それについて異論があったと。その中ではこれはやはり2通のほうと、当然それは連動しているいろいろまた設置場所を考えなければいけないということだと思います。

仮に上田方面に多部制・単位制が設置されてくれば、上田高、上田千曲の定時制もそこへ統合していけばいいかなという気はします。しかしそれがもし不可能ならば、やはり上田高校、上田千曲の定時制は存続価値があるなと、いうことを思っています。まずそれが一点。

それからもっと前に、多部制・単位制の必要性とかうんぬんということについてですが、今日は総合学科高校の実際的な説明があって、かなりイメージが具体的に、いい資料が提出されて、その必要性また価値というものを、はっきりしてきたのですが、多部制・単位制については残念ながらいいですね。

そのため、イメージとして非常に弱い。確かに先ほど小林委員さんがおっしゃったように、遠くからでも通いたいと思えるような多部制・単位制、総合学科と具体的にイメージしてくれば、それもまた別なんです、まだそこまで至っていません。

そういった中で、ひとつの案とすれば交通の利便性のいいところに普通科と併設して多部制・単位制を置いて、そしてそれを充実させていく。そういうことによって、だんだんそのよさが生まれていけば、これは例えば普通科をだんだん減らしても多部制・単位制の価値が出るのではないかと思います。

ですからまだ非常にそこら辺が見えない部分もあるし、説得力も少ない。そういうものが影響して、一般住民の方からは多部制・単位制の必要論が出てこない。それで多部制・単位制をつくってくれという声はほとんど私の耳に入っていない。むしろ現在の定時制を継続してほしいということが強い。

そういうことを考えると、今言ったようなことが私は考えられるなと思います。

以上です。

（西村委員）

2時間かけて多部制・単位制と総合学科について説明がございまして、私には皆さん、ある程度イメージができたのかなと思っていました。けれども、今までの意見を聞いてみますと、総合学科についてはある程度固まってきましたが、ただ多部制・単位制についてはまだ何となくマイナスイメージが皆さんの中にあるという感じがします。従って、もう一度多部制・単位制についての小林さんがおっしゃったように、時間かけても行きたいと学校にどうすればいいのか。その辺の説明は、県教委としてもやる必要があると思います。

小諸高校には音楽科がございまして、この学科の生徒は2時間半かけて松本から数名来ます。白馬からも通っています。つまりそういった学校にまず多部制・単位制の学校がどうしたらなるのか。その辺の共通理解ができるように、やっぱり説明をしていただく必要が私はあると思います。

（原 委員）

魅力ある多部制を考える、それも当然一理あることであります。しかし現実が、現状から学校を立ち上げていくと、そういう目標に向かっていくというところでもあります。そうした場合に、私は同じことを繰り返しません、要するに定時制の存続を前提に私は考えていただきたいというのが、まずあるんです。

多部制で午前部、午後部、夜間部というふうになって、今、定時制に行っている子どもたちが、そこで少人数が保障されなくなるので非常にこれは難しくなると。そしてこれもイメージされるだけだと思いますけれども、午前、午後、夜間という学校運営というのは、しかもそれぞれの課程が相互乗り入れをしますから、非常に複雑であるわけです。

学校運営、学校管理が大変難しい問題が生ずることは、これは明らかに予想されるんです。長野県内では、完全な形の多部制・単位制というのはまだない。それに準ずる形は松本筑摩ということでもあります。

そう考えてみると、私はこの場所の問題について、さかんに「佐久だ上田だ」という議論はありましたけれども、非常にリスクが大きい中で、何かよくわけの分からない、きっちとシミュレーションができない、という疑問も何回か出されていますよね。そうしますと、本当に見通しがしっかりならない、そういうリスクの大きいものを、佐久だ上田だって議論をすることはないと思うんです。

私はリアルに長野県内の現実を見た場合には、松本筑摩さんの準の形になっていますから、その多部制の意向と成果ですね。大変一人に期待しているという、ある意味ではきつい言い方になるかもしれませんが、しかし新しいタイプの学校をつくるということは、そのくらい慎重にやった方がいいと思います。

つまりリスクのあることは、すぐに取り付けることはしない。松本筑摩の努力を見習うことが、一番私はリアルな対応だと思います。

（和泉委員）

総合学科のほうは、私は総合学科、それから多部制・単位制の話も、要するに少子高齢化の中で、人口が減っていく中ではそれなりの学校が減っていくしかないと思います。それは先ほど委員長さんが言われたとおり、やっぱり1学年3学級だと、要するに今度は先生の人数、本格的な受け入れ人員、教える側のそれにかかる事務の方も、それなりの人数になっていくと。

そして片や今、学校そのものは非常に多機能というか、いろいろな分野の勉強というものを取り入れていくと。ある面では先生が多能というかいろいろなことを教えなければいけない。それに対して、より専門的になっていくかと、そういうことになると、ある程度まとめていって、そうして先ほど塩尻の話もありましたけれども、学校施設も時代もある程度流れについていかないと、古い設備で、授業をして教えて、もう現場はもっと新し

い設備が出たと、そういうことから考えていくと、僕はやっぱり多部制・単位制は必要だと思う。

そのひとつは、少子高齢化や効率的なものと、その中で今度はその機能の目的や必要性があるんですが、じゃあ運営の仕方を今の学校のどこにくっつけちゃうとか、その辺のところは、もう少しそこは討議したほうがよいと思います。

必要性和技能の目的は持っているのだけれども、学校の具体名が出ちゃったら、どうもそのイメージがあるので、本当に必要な議論のための、どういうふうにするかということで、そうじゃなかったら当然通学の利便性だとか、そういうこともあるし、何回かこの前に言っていましたが、長野という地区は、山岳があって、非常に生活圏が非常に広域になるんですね。ある程度行政的な配慮で、寮か施設をやっていないとまずいと思います。

この辺はまさに政治の分野だと思っているんです。だからある程度は、やっぱり考え方を我々の地区（佐久）と上田との中でやっていけと。そういうようなところも、出していく部分を、その一部を考えていかなければなかなか話してまとまらないと思うんで、そのところで表現を補いながら、トータル的にはやっぱり減らしていったら、それから多部制も単位制も必要だと、それから総合学科についても必要だと思います。

ただ危惧しているよりも、これからの代案について、これからの議題について、代案を持っていないんだから、どう育てるかということと、今はその辺のものについてみんなが知恵を出していくべきではないかと思います。

それをしていくところでは、むしろ私は魅力ある高校づくりになるのではないかなと思うので、そういう進め方をしていけばいいんじゃないかなと思っています。

（市川委員）

はい、お願いします。

今出ていました少子高齢化、少子高齢化の中で青年後期の教育をどのようにするかということです。社会の接点としての役割を担ってきた高校が、どのような生徒を育て、どのような青年を育てて社会に出すか、あるいは進学していくこともあるわけですが、我々は多くの問題を抱えてきて、そしてこのような勤労意欲、学習意欲の状況で、そのまま社会に飛び出していったら、これからの新しい時代にどのように生徒たちに、あるいは青年後期の教育を受けた青年たちに、社会の生きざまを、どのように教示させて本気にすすめるのかということだと思います。

この少子高齢化を迎えて、この中では先ほど委員長さんが数字を具体的に挙げていただきました。6 学級にした場合の学校の基本的な教育の役割、クラブ活動、それから各学習機能の先生方の数、そんなことがありました。そういった基準の中で、先ほどコストだけではなくて、学校も生徒数が少なくなってきた。

これは定時制があちこち分散していくのではなくて、ひとつ機能的にこのように社会の接点としての高校、定時制ではあるけれども、高校を位置付けて社会に送り出すか、こういうようなことを委員長のほうが先ほど数字で指摘していただいた観点で合理化し、まとめて統合し、先ほどの太田委員さんの話にもありました、「大部屋化」ということだと思いますけど、これはコストだけの面ではなくて、先ほど委員長さんのほうから具体的に申し上げたということが、青年をどのように育てていくのかということだと思います。

これは小さくても、小人数であればそれで成り立つのか、いつまでもそのようことができるわけじゃないわけですね。いつまでも母親の子宮の中にいるのかという、そういうようなことから、いかに飛躍させるかという大きな問題だと思います。その点は、そういう観点から、そういうコストだけではなくて、様々な要因があると思いますけれども、統合し、連携し、ネットワーク化する、そういうものが必要になってきたということだと思います。

しかも新しい時代に入ろうとして、システム的に変えていく。新しい時代に、新しい教育にあって、新しい世紀にどういうふうに育てていくか。これは単位制に期待するものがあるということに、前回までの委員会であってきただけではないでしょうか。それで具体的に今日は、総合学科としての単位制としての学校を運営していこうとなり、しかしそれを、定時制、全日制だけじゃなくて、3 つに分かれる学校が出現する、それが統合し、合理化した中で、多くの先生が個性ある先生方の中で育ててもらって、育てていく教育課程のシステムがあって社会に出すと、そういう学校が必要だということで、多部制・単位制ということに、私は期待するというようなことも、今まで申し上げていることだと思います。

付け加えましたけど、ぜひその点で考えていただいて、いただきたいと思います。

（飯島委員長）

どうも委員会の中では、何回か言いましたように、具体的な学校名が出てきてしまったばかりに、上田だ、佐久だ、あの高校だ、その高校だというふうになってしまいますけど、私は全般的に今の少子化などから魅力ある学校づくりをしていくために、今の総合学科、多部制・単位制、こういうものを導入していくか。と、いうことに対しては皆さん、いかなものなのでしょうかということで、まずこれが決まらないうと、今度はどこにしましょうか？そこには多部制・単位制に？、いろいろご意見が出ているように、ここはE-Learningを導入したり、それから中高一貫校にしたりという、そういう新たな付加価値をプラスしていく話に進んでいかなければいけません。

ですからその辺のところはいかがでしょうか。

（太田委員）

行政の皆さんは保守的であると思っていましたが、多部制・単位制高校導入案をみる限りでは、この見方を変えなくてはならないと思っています。

原委員のご心配は、現在の小規模化した定時制学級の中でこそ、悩みを抱えた生徒達が居場所を見つけられているのであり、多部制・単位制高校として大規模化した学校では適応が難しいということだと思います。

そういうことでしたら、対応策はいろいろ考えられるのではないのでしょうか。カウンセリングの専門家を常駐させるとか、適任の先生方を集めるとか、定時制のクラス運営は小規模化したり、入退室の方法やホームルームの場所を工夫したりすることで、クリアーできると思います。

皆で知恵を出し合い、問題点を解決しながら、新たな発想により学校づくりをおこなうことが、必要ではないかと思っています。

ただし、総合学科・単位制については、進学校である塩尻志学館高校のように進学進路に迷う生徒のためには効果的な学校でしょうが、就職者が多い丸子実校には果たして良い

のかどうか疑問を感じています。事務局には、丸子実業高校の就職率を調査していただくようお願いします。

（飯島委員長）

総合学科あるいは多部制・単位制、悪いことばかり聞くんじゃなくて、悪いことがあれば、それをいい提案を付け加えていく、変えていくという、それが推進委員会の役割だろうと思うんです。出たものを、すべて賛成するんじゃないくて、あくまでもたたき台ですから、それをたたき台にした上に、「こういうよい方法をぜひ取り入れてほしい」という前向きな改革の意見に、そろそろなってこないかな。と、私は思いたいのですが、その辺はどうでしょう。

（原 委員）

私が、悪い面ばかり強調しているということではないですよ。ことに多部制・単位制についてはクリアすべき課題が大き過ぎるということを申し上げているんですね。今、太田委員さんから、定時制でケアしている子どもたちを、その生徒たちを、多部制・単位制に合うか合わないか、私たちもそれは考えたいと思います。そういう視点で考えたいと思います。

しかし人数の問題は絶対的な条件なんです。それは新しい多部制の学校へ行って、そういう小さな教室があるか、あるいは特別な部屋があるか、そういうことでは解決できない問題なんです。つまり私が冒頭に言いましたように、そのことについては現行の、この小規模な定時制を残す。私は多部制・単位制について、全面的に否定しているわけではない。単位制の原理で運営する、そういう学校も、あるいはあってもいいと、こう言っているわけです。

だから今の学校の夜間定時制をなくしていくという、その方法はあまりにも子どもたちに対して先ほど言いましたが、選定によっての観点が欠けるということを申し上げたのです。

ほかの問題もちょっと触れさせてもらっていいですか。

（飯島委員長）

はい、どうぞ。

（原 委員）

多部制・単位制が野沢南という問題があると同時に、今日は佐久で開催していますが、望月の問題もあるわけですね。前回私は望月の学校が80年を迎える中で40年は、ほんとに地元が支えていた学校だと。それを、一方的になくすというのは、これは納得できないという言い方をしたんですね。

もうひとつの問題は、これは第4回のこの委員会に出された資料で、今、長野県の高校がさまざまな形で魅力づくりをやっているという、そういう資料が出ましたね。私は今それを持っていますが、望月高校さんが候補案に名前が挙がる前から、魅力ある高校づくりということで、地域教育プラットフォームという、県内ではこのような名称を掲げて取り

組んでいるところはないと思いますが、そういう独自の模索を、教育実践を展開される。

13年度から、県下で唯一地域住民、保護者が生徒とともに授業を受けるという、そういうオープン授業が行われている。こういうほんとに地域とともに懸命な努力をされている、こういうことは望月高に限らないと思うんです。他の高校もそうです。

そういう実践、魅力づくりへの取り組み、こうした事柄をどう評価されて、統廃合の対象にされたと、そこが分からないわけです。

(飯島委員長)

前回の最後のときに、そのご意見がありました。ただ、違うデータで申し上げますと、2007年には大学が全入になるそうです。それは、それだけ子どもがいなくなっている。それじゃあそのときに、大学でもこのような問題に直面しているわけです。例えばA大学、B大学、両方受験し双方受かったときどっちを選ぶか、やっぱり魅力ある大学しか選ばれないんですよ。そこなんです。

ですから今、望月高校という名前が出てしまいましたからいけませんけれど、望月高校が魅力があれば、定員が充足しているはずなんです。どんな小規模校でも。高校の名前を出してはいけませんけれども、要はそこだと思うんです。それプラス全体の子どもの数が、いわゆる第6区なら第6区の定員数より少なくなってくる、ここなんです。

ですから歴史とか、伝統とかいろいろなこともありますけれども、ひとつ子どもたちのちゃんとした学びの場の適正規模を設けてあげるためには、今の市町村合併が行われておりますが、吸収合併でなく、対等合併をして校舎はこちらを使うという形もしょうがないのでは、そういうことを私自身は思っています。

ただ具体的な高校名とか、そういうことはまた皆さんで十分この場で議論していかなければいけませんけれども、今日、県教委が出された長野県の人口統計からも、これは明らかになってきていることで、避けて通れないだろうと。いくらいい物でも残しておきたいけど、残しておけない事情になりつつあるということは、私たちは認識しなければいけないのだろう。その中でより良い改革、子どもたちのためにより良い改革をどうするのか。いい学びの場所をどこに設けてあげようか、そこを考えていただきたいなと思うわけです。

多部制・単位制、総合学科、これはどうなのか。私たちは受け入れていくのかどうか。いや、ほんとに全然違う代替案を考える必要があるのか、いや、総合学科については今日十分お話を聞いて、そういうものをぜひ、それじゃ両方の通学区に設けていきたいという形にしていくのか、逆にいらないよと言うのか。いや、多部制・単位制、こういうものも大事だ。大事なのは、今、野沢南という名前が出ているわけですが、佐久方面につくったら、上田のほうはどうするの。

具体的にかかわっていくには、まずこの方針はどうかという、皆さんのある程度意思統一ができないと、その先が進まず、行ったり来たりで必ずなってしまうんですね。

今日もう5分しかありませんから、ぜひ次回からは前向きな形でこの多部制・単位制、総合学科、しかも第2通学区では受け入れるのかどうか、その辺のところを、ご議論いただきたいなと思います。

そしてその後、それじゃそれならば細かいことを、少しずつ見直していく、どこをどのようにするのか。そういう形に進めていかないと。もう少子化がこれだけ進んできている

以上は、この改革は避けて通れないというのが私の認識であります。この辺のところを、お考えをいただきたいと思います。

最後、あと5分しかありませんけれども、私の意見に対しても、もし何かありましたらどうぞ。

（和泉委員）

意見が分散してしまうといけないので、例えば今日のことは総合学科の話を聞いていて、例えばここの佐久だと、野沢に技術専門学校がありますよね。設備も結構大きいし、先生たちもかなりいらっしゃるのですが、今、多分あれは労働省の流れだと思うんですが、上田にもありますがそれも労働省の流れですけど、そういうコストパフォーマンスで地域にいろいろなものがあるのだから、それを今検討していく中で連携なども考える必要があるのではと思います。

例えば先ほど塩尻の説明でも、介護実習がありましたが、あの施設も極端な言い方をすると、地元の病院の大きいところに行けば、最新のそれなりにケアできる設備であるけど、それもまだひとつの学校に導入して、そしてそれを大事に使っていくということよりも、その辺のところも含めて今回、南高とかいろいろ名前は挙がっていますが、絞り込んでいく視点の高校の評価を「何と何」について討議するのかを決めていかないと、例えばさっき規模というのが25名規模だから、そうするとどういう問題あるいはメリットがあるとか、何か多分今名前が挙がった高校について、何か基準というか基本的な考え方があれば次回説明していただく。

だから何の視点で議論していけばいいのか、先ほどは利便性も出てきますし、いろいろな意味合いがあるんで、そうかといえば「×」をつけるか採点というか、何かそういうところがあると、もうちょっとニアリーのところの一番近いところのものを、討議すればいい。考える視点が、分かりやすいようにすると、討議の意見も集中してくるんじゃないか。あるいはそこに漏れている視点があれば付加していくということではできそうな気がするのです。

（飯島委員長）

どうでしょうか。

地域のいろいろなものを利用して、連携を取っていく方法もあるだろうというご意見と感じましたがいいですか。

（和泉委員）

そうです。

先ほど総合学科を立ち上げるときに、どれだけの投資がいりますかと言って、ちょっと数字も見えないので、その辺の遅れだと思うんですよね。だから少なくとも、我々は2校でもと言うんですが、どういう認識でしゃべっているのか、ちょっと分からないので、そういうことは知っていたほうがいいのかと思いました。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

それともうひとつ、総合学科に対しては長野県の中で成功例があって、今日は説明をいただきました。かなり委員の皆さんは納得いく形で、説明をお聞きなったと思います。

ところが多部制・単位制は、まだまだご覧のように発表をしていただく学校がないということで、どうしても県教委の資料説明が主になっていますが、この辺のところはどうなんでしょうか。よその県の先生に来てもらってということは可能なんでしょうか。それはできないんでしょうか。どうですか。

(篠原教育幹)

例えば私どものほうから、時間を設定していただいて訪問をしながら見学するということは可能だと思います。

ただ来ていただくということは、これは長野県の推進委員会ですので、ちょっと若干難しいという気がします。それからいろいろとご意見をちょうだいしました。ありがとうございました。

塩尻志学館の立ち上げのときは、県内には全くない状況でした。従いまして、いわゆる他県の状況、十分に資料として進めて、そしてその中で検討を進めるするという経過はございます。

同じように多部制・単位制にしましても、今回この第8回では評価するご意見も多く聞かれたわけですが、やはり集められる範囲の資料は私どものほうでしっかりと、さらにこういう点が必要だということであれば集めたいと思います。

ただ長野県内に前例がないから、ここで多部制・単位制はもうしばらく待った方がよい、あるいは普通科と併置した形でしばらく様子を見る。これは逆に私は、かえって逆効果であると思います。つまり先ほどの塩尻志学館のほうから説明の中にありましたように、やはり教員がどのような意識改革をし、そしてどのような目的を持って、その学校を育てようとしているか。このようなことは避けて通れないことでありまして、そういったところの中で各学校内でさまざまな努力をしているとのご意見も出されましたけど、そういったものを参考にさせていただきたいと思っています。

そんなことで検討委員会の「最終報告」にありますように各第4地区に1校、合わせて4校の総合学科をお願いするということでご検討をお願いしているということは委員の皆さまご承知のことだと思いますので、ぜひこの辺は十分踏まえていただきながら、ご検討いただければとそんなふうに考えています。

以上でございます。

(芹澤委員)

議論を少し整理したいいいかと思います。とにかく話し合いの後ろにすぐ具体的な名前の高校名が入ってきて、行きつ戻りつになってしまうんですね。そうではなくて、まず与えられた命題の魅力ある高校づくりはどうするかということを議論して、そういう中で総合学科についてはほぼ当面ご了解というかこの通学区ではやっ払いこうというような、方針が出てきている。

ただ多部制・単位制については、多少まだもう少し時間をかけて議論をする必要があるなという認識を持っていますから、次回その辺を中心に県教委のほうで、もう少し細かく説明していただいて、次回検討したらいいかなと思います。

その議論する場合、具体名ですね。例えば野沢南がどうか望月がどうか、そういうのはしないで魅力ある高校はどうするか、ここから出発しないと必ず議論は行きつ戻りつになってしまいますので、委員が発言する場合は具体の高校というのを抜きにして、そういう魅力ある高校はどうかとか、それを多部制・単位制を採用するかどうか、そういう点で議論をしていかないと、私はいつまでたっても駄目だと思いますので、委員長その辺をちょっと整理して、次の具体的な高校名なりに入っていく。こういう方向をお願いしたいと思います。

（原 委員）

これは私の記憶が正しければですが、第6回の委員会の最後に委員長さんが次回からは校名も挙げてよしとなったわけです。だからさっきも第7回、今度8回と、そういう名前が出るのは、これは必然的なんです。

（飯島委員長）

今のとおり、行ったり来たりはしょうがないと思うんですが、具体名をあえて前回県教委から「たたき台」を発表してもらったわけですから、発表した中で今日みたいな議論はしょうがないと思うんです。この中でそもそも両方のいい点、さまざまなことが分かってきましたら、私たちが委員会に委託された多部制・単位制、総合学科、それをこの地域に受け入れた形だと、どのように進めていったら良いかということを私は言っているわけです。

その受け入れを拒否するならば、もうその先は進まないですよ。それをどうするのだというふうに、私たちは委託されているわけですから、「第2通学区ではそれは受け入れない。」そういう報告で終わってしまうと思うんです。

ですから受け入れというものを、「ここはどういうふうに修正してほしい」とか、「ここはこういうふうに考えてほしい」。こういうものを私たちの意見として、机上ですが答えを出していくという事が私は大事だろうと、こんなふうに思っています。

これで今日の委員会を終わらせていただきます。

なお、次回の日程についてだけ、事務局からお願いします。

（植松主任教育支援主事）

次回の日程でございますが、候補といたしまして10月9日日曜日、連休中で恐縮でございますが、日曜の午後を考えておりますので、また詳しくは委員長さんとはご相談の上あらためてご連絡差し上げる形としたいと思います。よろしくお願いいたしますと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

それでは第8回推進委員会を終わります。

ありがとうございました。